

SATO YAMA UMI プロジェクト
ユース海外インターンシッププログラム 活動報告書
カンボジア派遣 森高雪菜



「ユキナ先生、いつ帰ってくるの？」—カンボジアの学校での勤務を終え、日本に帰国した私の携帯には、沢山の生徒から毎日メッセージが届く。私が滞在したカンボジアの小さな村は、愛する人々が住む第二の故郷となり、日々その地に想いを馳せている。今でも、生徒たちの太陽のように輝く笑顔と、限られた環境下で最高の教育を提供しようと奮闘する教員の方々の姿が忘れられない。

カンボジアの小さな村において、コミュニティに入り込み、その地の人々と共に働き、暮らした経験は、生涯心に響き続ける大変貴重な経験となった。この報告書が、カンボジアについて興味関心を持つきっかけになれば幸いである。

海外で教員として活動することは、夢の1つだった。私に、このような素晴らしい機会を与えてくださった、SATO YAMA UMI プロジェクトの関係者の皆様に心より感謝致します。

インターンシップ参加の背景

カンボジアでのインターンシップ参加の目的は主に二点あった。第一に、環境保全と開発の両立のあり方や可能性について理解することだ。現在、エネルギー・インフラ関連の企業に内定しており、将来的に東南アジア諸国を中心としたインフラ開発・整備に関わりたいという志がある。そのため、現地での活動に加え、環境リーダーシップ講座等を通じて、環境保全や環境問題について集中的に学び熟考することが出来る機会がある本プロジェクトは大変魅力的であった。実際に、上記講座で学んだ生態系や鳥類に関する知識は、現地でも非常に役立った。今後も環境保全とインフラ開発という 2 つのテーマを常に念頭に置いて仕事に励みたいと思っている。

第二に、真の意味でカンボジアを理解し、“実践”することだ。現地コミュニティに溶け込み、カンボジアの人々と心を通わせながら暮らし、現実から目を背けない人間になりたい。カンボジアの人々と協働し、自分がコミュニティにいる存在意義や役割を明確に、大学で専攻した教育を“実践”することを通じて国や人についてより理解を深めたいと考えていた。私は 2 年前、政府系の国際交流プログラムに参加し、日本代表の 1 人としてカンボジアを訪れた。私たち代表団は国家の来賓として手厚くもてなされた。宿泊先は国内最高峰のホテル、移動の際は必ず警備が付き、毎回の食事は非常に豪華だった。その一方、移動車の窓からは最貧困層の人々の暮らしを多数目にした。フンセン首相を表敬訪問した際も、内政不干涉と独裁政権を正当化するスピーチを黙って聞き、その後は笑顔で握手をすることしかできなかった。私は非常に強い無力感を感じ失望さえした。作られたプログラムによって私が得たカンボジアのイメージとは、相手の意図が強く反映されたものであった。そして、私は日本の代表として訪れても、同国の真の現状を理解することも、変化を起こすことも、多数の貧困層の声を聞き代弁することも出来なかった。こうした経験から、コミュニティで暮らし、働き、より多くの人々の声を聞き、現状をこの目で見たいという強い希望があった。そして、真の意味でカンボジアという国を理解したいと強く思っていた。

このような目的の下、インターンシップを行うに至った。カンボジアでは Kampot 州にある Anlung Pring 地区での小中学校での環境教育・音楽教育（環境教育とのクロスカリキュラム）・英語教育を行った。その他、教職員会議等に出席する機会もあった。

インターシップ活動報告

I.環境教育

Mlup Baitong が現地で行っているプロジェクトは『オオヅル生息地におけるオオヅル保護のための地域住民への環境教育』である。そのため、そのテーマに合い、かつ小中学生向けに改良した環境についての授業を行った。その際、①知識の伝達(Knowledge acquisition)、②問を与えること(Questioning)、③問に対して考えること(Think)、④自分の考えを共有すること(Sharing)に重点を置いて授業を行った。



教材については、英語が堪能なカンボジア人の友人に多大な協力を得てクメール語で予め作成した。授業では英語科の先生方に協力して頂いた。

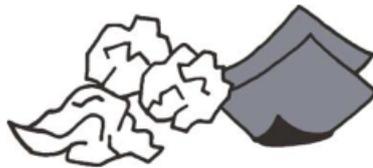
言語の問題をはじめ、不安な点が多くあったが、生徒は非常に真剣に耳を傾けてくれた。“学ぶ姿勢”に大変驚かされた。以下は、実際に現地で使用した教材の一部である。

Raise your hand if you make these kinds of trash!

លើកដៃអ្នកឡើង បើសិនជាអ្នកបង្កើតសំរាមបែបនេះ



ដបជ័រ



ក្រដាស



កញ្ចប់នំ និងកញ្ចប់
អាហារជាដើម

Today, We will be learning about “Garbage” and “Environmental Issues” It seems to be difficult but “Don’t worry!” We’ll learn together!

ថ្ងៃនេះ យើងនឹងរៀនអំពី “សំរាម” និង “បញ្ហាបរិស្ថាន”។ មើលទៅដូចជាពិបាក ប៉ុន្តែ “កុំបារម្ភ” យើងនឹងរៀនជាមួយគ្នា។

Q1 What kind of trash do you produce everyday?

តើសំរាមប្រភេទណាដែលអ្នកបង្កើតជារៀងរាល់ថ្ងៃ?



Q2 Why do you think reduce trash is important?

តើហេតុអ្វីអ្នកគិតថាការកាត់បន្ថយសំរាមមានសារៈសំខាន់?

មូលហេតុដែលយើងគួរកាត់បន្ថយសំរាម

⇒ ដើម្បីការពារបរិស្ថាន និងរក្សាធម្មជាតិដ៏ស្អាតនៃប្រទេសកម្ពុជា



ប្រទេសកម្ពុជាមានធម្មជាតិដ៏ស្អាត។ ធម្មជាតិដែលអ្នកមើល
ឃើញជារៀងរាល់ថ្ងៃនេះតាមពិតទៅគឺពិសេសណាស់។
ឧទាហរណ៍ ខ្ញុំមិនដែលឃើញសត្វក្រៀមនៅប្រទេសជប៉ុនទេ។
ការកើនឡើងនៃសំរាមនិងការបោះចោលសំរាមនឹងបំផ្លាញធម្ម
ជាតិដ៏ស្អាតនេះនិងជីវិតសត្វនិងសត្វបក្សីដែលរស់នៅទីនោះ។
តោះ យើងរួមគ្នាការពារធម្មជាតិដ៏ស្អាតនេះ!

មូលហេតុដែលយើងគួរកាត់បន្ថយសំរាម

⇒ ដើម្បីរស់នៅដោយជាសុខភាព



បើសិនមានសំរាមនៅលើដី អ្នកនឹងមិនមានអារម្មណ៍ល្អ
ទេ។ បើអ្នករស់នៅក្នុងភូមិស្អាត សាលានិងផ្ទះរៀន
ដែលគ្មានសំរាម អ្នកនឹងមានអារម្មណ៍ល្អ។

II.環境教育×音楽教育

座学での学びだけではなく、楽しみながら学べる実践活動を重視した。その一環として、環境教育と音楽教育を融合させた授業を行った。リユースやリサイクルへの理解を深めてもらうために、道に散乱している大量のペットボトルを使って楽器をつくるワークショップを行った。私が勤務した小中学校全てで音楽教育が行われていない。教員不足及び楽器等を含む教材不足のためだ。そのため、生徒は非常に楽しんでいった。



授業の流れ

- ① リサイクル・リユース・リデュースの用語自体や重要性について学ぶ
- ② カンボジアのごみ問題について解説
- ③ 身の回りのごみについて考えるー環境保全の重要性
- ④ フィールドワークー学校周辺にてペットボトル拾う
- ⑤ ペットボトルを用いて音の出る簡易楽器の作成
- ⑥ 曲に合わせて合奏

インターンシップを終えての学び

第一に、カンボジアの地方部の現状を知ることが出来た。

『私は学校を愛している。学校を良くしたい。どうか力になってくれないか』校長先生が私に対して常に言っていた言葉だ。この報告書を読んでいる皆さんは、“学校”と聞くと何を思い浮かべるだろうか―洗練されたカリキュラム、しっかりした造りの校舎と教室、水道やトイレ、毎年配られる新品の教科書、芸術を含む多彩な教科、修学旅行、教授力を持った教師、クラブ活動、栄養価の高い給食。私がインターンシップを行った小中学校では、上記の全てが無かった。電気も、ガスも水道も無い。カンボジアでは約 35%の生徒が“小学校を中退”する。信じられないかもしれないが、これが現実なのだ。しかし、生徒たちは勉強意欲に溢れていた。充電式の非常灯を使い、ボロボロの教科書を持って、「勉強を教えてください」と懇願する生徒に対する敬意を抑えることが出来なかった。授業の無い土日でさえ、特別授業を頼まれ、実施した。



【写真1：今回は校長先生のお宅でホームステイをさせて頂いた。子供たちは充電式非常灯を使って夜まで勉強していた。「英語を沢山勉強して将来ユキナと沢山話したい」と言ってくれた。】

第二に、何かを実践する前に、コミュニティに溶け込むことの重要性を感じることが出来た。今回、カンボジアの小さな村で暮らすという経験をしたが、“コミュニティに受け入れてもらった”という感謝の気持ちが非常に強い。外国人が殆ど来ないこの村で、部外者の言葉も解さない私がコミュニティで受け入れられるのか、役に立つのか、無意識のうちに“かわいそうな人々”という偏見のフィルターを通して人を見てしまうのではないかと非常に不安であった。しかし、予想に反して人々は愛を持って私に接してくれた。放課後、生徒たちは、「今度は私たちが先生になる番です！」と言って、私のために毎日クメール語の特別授業をしてくれた。十数人の小さな先生たちの厳しい授業のおかげで日常会話程度のクメール語を習得することが出来た。言葉が出来るようになると人々の反応も変わってくる。生徒だけでなく、他の教員の方々や村の人々からも沢山声をかけてもらえるようになった。週末には、村の結婚式に参加させていただいた。カンボジアの伝統的なダンスを村の人々に教えてもらい、「ユキナはもうカンボジア人だね」と言ってもらえた。その他、自身の健康に支障のない範囲で、出来る限りカンボジアの人々と同じ生活をしようと心掛けた。



【写真2：毎日クメール語を教えてくれた生徒たち】

一見、ただの文化交流に思えるかもしれないが、現地の人々と同じように暮らし、同じものを食べ、現地の言葉を学び心を通わせることで、“自分が成し遂げたいことや目的”が容易に実現できたのだ。具体的に述べると、私は今回、音楽教育と環境教育を融合させた授業と、英語の授業を中心に行いたいと思っていた。当然一人で出来ることではない。学校で働くため学校側との調整や教員の方々の理解を得る必要に加えて、言語の問題もある。今回、私がインターンシップの目的を達成するにあたって非常に多くの人々が協力してくれた。自分のやりたいことや目的を、異国の地で実践するにあたって、様々な人々から理解や協力、助けを得る必要がある。その一番の方法は、「あなたのことをもっと知りたい」という敬意を示し、その地の文化や言葉や人を理解しようと行動することであると強く感じた。将来、海外で働く際もこの点は心に留めておきたい。



【写真3：音の殆ど出ないピアノを修理する先生方。出来れば授業でピアノを使いたいという私の要望に応えるため、夜22時頃まで修理して下さった。翌日には約7割の音が出るまでになっていた。ピアノは日本から寄贈されたもの】



【写真4：ピアノを使って、みんなでABCの歌を歌いました】

第三に、ボランティアやインターンに対する価値観が大きく変わった。村に居た時には、多くの人々に「ユキナのように、ここに住んで、実際に学校で働いてくれる外国人はいなかった。皆数日ここに来て、視察してすぐ帰ってしまうの」と言われた。プノンペンのオフィスに戻ってからは、「ユキナ今回は本当に来てくれてありがとう。日本の学生の多くは良いホテルに泊まりながら数日ボランティアして、すぐ帰国しちゃう。そして戻ってこない。そこが欧米の学生との違いだよ。」と強く言われた。「日本の学生はすぐ帰る、そして二度と戻ってこない」という言葉は心に刺さった。首都プノンペンに戻ってからはチェコ人と同じ部屋で暮らしたが、彼女は「短期のボランティアは、受け入れる側が本当に大変なんだよ。一時的に知らない人が来て、勉強の方法や方針も変わってしまうし、スケジュールも崩れる。だから日本の学生にももっと、長期的な目でカンボジアや途上国に関わってほしい」と言った。まだギャップイヤーや休学という選択肢が普遍的でないという理由を考慮しても、確かに日本の学生は短期的かつ一時的なボランティアに携わる学生が大多数のように思える。現在、日本では非常に多

くの海外ボランティアプログラムが溢れている。参加料金も学生のアルバイトで行けるような手頃なプログラムも多い。しかし、事前の準備や調査を伴わず、受け入れる側の状況やニーズに合わない多くのプログラムは、単なる自己満足の活動なのかもしれない。そのようなプログラムに参加するのであれば、国の名所を周り、その国の魅力を存分に楽しむほうが良いのかもしれない。ボランティアやインターンという言葉に対する価値観が大きく変わった。より多くの学生や社会人が、長期的に途上国におけるボランティアに参画する方法について考えていきたい。

最後に、将来的に今回滞在した村の役に立つ人材に必ずなりたいと強く思っている。声なき人々の代弁者になりたい。カンボジアはまだ民主主義とは到底言えない状況である。選挙において同国最大の野党が解党されたり、現行の体制に反対するジャーナリストが拘留されたり、一般市民でも反政府に関連する発言を行えば2年間拘留される。言論統制や情報統制が非常に深刻である。また、カンボジアは搾取され続ける国である。大量の中国資本の投入により、都市部は中国系企業で溢れている。カンボジアの無農薬で質の高い米やマンゴーは安価で全てベトナムに輸出されている。カンボジアの美しい山々の木々は周辺国によって伐採され続けている。今回出会ったカンボジア人たちは皆政府に対する不満、そして国の未来に対する希望を語ってくれた。同時に、「助けてほしい」と言った。今後数年かけて、実務を通して、技能や専門知識を身に付け、成長してまたカンボジアに帰りたい。将来的には、修士号を取り、東南アジア地域の国際教育協力やインフラ整備等の第一線で働く人材になりたいと強く思っている。今回出会った人々に恩返しをしたい。

学生生活を終え、就職前にこのような貴重な経験をさせて頂き、ご尽力頂いた大変感謝しています。ありがとうございました。

森高雪菜